

千歳手話の会誕生エピソード

あるろうあ者が遺したその誇らしき財産

中 村 秀 子

手話通訳士（千歳手話の会会員）

「しあわせになりたい」

ここに、昭和五十三（一九七八）年五月二十八日初版発行の『しあわせになりたい』という書名の本がある。著者は坂本秀男、目次の前に前書として「しあわせになりたい」という詩が掲載されている。

「しあわせになりたい」

骨の痛みに 眠られず

夜明けを数えていた時

逃げていく音を追いかけ

時計を耳に押しあてた時

どんな体になっても

どんな生活をしていても

いつでも 願いは ひとつ

「幸せになりたい」

不変の 願いに

力をつくして 耐えも励みもしよう

妻の肩に 手を置いて

望むは 手稲の山々

坂本は昭和二十一（一九四六）年二月十八日に道東の厚岸で生まれ、平成十（一九九八）年一月二十日に札幌で亡くなった。この一人の人間の存在が、千歳に手話の会を誕生させる大きなきっかけとなった。

坂本が五二歳の誕生日を迎える直前に亡くなってから、今年（平成二十五年）でちょうど一五年になる。

彼は、小学校五年生の冬に家の手伝いで凍った松の木を割っている時、振り下ろした大きなマサカリが跳ね返り、右足をしたたかに打ったことが原因でのちに骨髄炎となったと著作に記されている。その後、右足大腿部骨髄炎治療のための闘病生活が始まり、何度か手術を繰り返す中で一二歳になった冬に彼は聴力を失った。聞こえる世界から、音のない世界へと軸足を変えることになった。

一三歳の時に札幌聾学校の小学部一年生として入学する。

「ろう教育は普通教育より三年の遅れがあり、二年間の闘病生活で五年の遅れがあった私は、まず追いつくことに全力をあげた」と著作にある。

休みの日には、当時札幌市の北一条西五丁目にあった道立図書館（現在の道立文書館別館）に通い勉学に励んだ。

高等部二年（一八歳）の時、図書館の掲示板に貼ってあった論文募集を見、応募することを決意する。題は「現代に生きる青年の使命」だった。

論文は見事一位となり、東京・九段会館で文部大臣奨励賞が授与された。昭和三十九（一九六四）年八月のことであった。

著作から引用する小説家・作家・山岡荘八の講評は次のとおりである。

十八歳の少年であります、札幌ろう学校に身をおき、極めて不自由な身で



写真1 坂本秀男 昭和21(1946)年～
平成10(1998)年

ンティア活動をす
るようになってい
ました。ぼくが実
際に坂本さんと関
わるようになった
のは、その翌年か
らだと思えます。
坂本さんは聴力に
障がいがあったけ

あり乍らしかも現代の時世に対し自分の周囲に起きてくる事実を通して切々と
これからの青年のあり方について述べて居りますが、極めて、文体、態度、思
想が優秀であると思いい位に推薦致しました。
受賞は彼の向学心を刺激し、その後働きながら通信教育を受ける道を歩
むことになる。

昭和四十五(一九七〇)年、京都の佛教大学通信教育部社会学部社会学部
祉学科に入学した頃、彼は千歳の家具製造会社で研磨工として働いていた。
その後、ボランティア活動を行っている聞こえる青年たちと出会い、行動
を共にするようになる。

その当時の様子を知る、かつて千歳手話の会会員であった二ツ川憲昭は
次のように述べた。

ぼくが昭和四十七年九月から千歳市社会福祉協議会で仕事をするようになって、その頃、社協にボランティアクラブがあり、青年たちが市内の障がい者施設を訪問する活動などをしていました。はつきりとした経過は思い出せないけれど、坂本さんともう一人、聴覚障がいをもつ青年が聞こえる青年たちとボラ

れど、彼の話す声は聞きとれたし、ぼくたちの言うこともわかってくれていま
した。ただ、もう一人の聴覚障がいの青年の言っていることがわからず、活動
を共にする中で自然と「手話を学ぼう」という気持ちがぼくたちの中に芽生え
たのだと思います。坂本さんはその後、札幌で仕事をするようになって千歳を
離れましたけれど、手話の会やろうあ協会の立ち上げの準備では何度も足を運
んで千歳の仲間にあだバイスしてくれました。

働きながらの通信教育で確実に知識や学力をつけ、向上心を持ち続けた
彼は、昭和四十七(一九七二)年に「学制と聾教育」という論文で再び文
部大臣奨励賞を受賞した。さらにその後、昭和五十九(一九八四)年には
体験記「職場と私」で労働大臣賞を受賞している。

筆者はその強い信念と並々ならぬ努力に、ただただ感服するのみである。
彼をはじめとする千歳の聞こえない人たちが、手話を学び聞こえない人
たちと交流したいと願う聞こえる仲間たちの思いが、やがて、千歳手話の
会設立へとつながっていく。

さらに、ボランティア活動に燃える青年たちは、人形劇、朗読など、自
らの活動の場を作り上げていくことになる。

千歳手話の会設立

昭和六十一(一九八六)年十一月三十日に配布された『千歳手話の会設
立12周年記念講演会(資料添付)』に設立の経過が詳しく紹介されている。

定期的な集まりの始まりは、昭和四十八(一九七三)年十二月六日から
毎週木曜日に東雲会館で聞こえる者と聞こえない者が一緒になって手話学
習会を開催するようになった。これが千歳手話の会の前身となる。

昭和四十九(一九七四)年三月二十一日には、千歳手話の会設立総会が

東雲会館において開かれた。会則（草案）では「本会の目的は手話の取得とろうあ者と健聴者の連帯と親睦、手話通訳者の養成である」と記されている。

千歳手話の会としての第一回学習会は総会から二週間後の四月四日木曜日午後六時三十分から東雲会館一階の会議室で行われた。以降、例会は毎週木曜日の午後六時三十分から九時まで、会場は東雲会館として会員に定着していった。

当時の会員名簿を見ると三五人の氏名が並んでいる。今では考えられないことだが年齢も記されていた。聞こえる者も聞こえない者も互いに役員を担当し、坂本は顧問として名を連ねていた。

昭和六十一年（一九八六）年十一月三十日に千歳市総合福祉センター（福祉センター）を会場に開催された千歳手話の会設立一二周年記念講演会で坂本は、「手話の会設立当初をふりかえって」と題して講演を行っている。

筆者も会場にいたが、不甲斐ないことに話された内容はあまり記憶に残っていない。ただ、講演が始まる前に彼が「五周年とか一〇周年とか、記念行事は区切りをつけて行うことが多いのですが、今回、一二周年記念ということで案内をもらいました。考えてみれば、一二歳というのは小学生の年齢です。小学校を卒業して千歳手話の会はさらに成長して中学生になる。そのような場と呼んでいただきありがとうございます」と話されたことだけははっきりと覚えている。

本来なら一〇周年という区切りで行うはずだったのに、ただ、準備が遅れて一二周年という中途半端な記念行事になってしまっただけのことだった。私たちの頭の中には小学生も中学生もなかった。だが、彼は、その中途半端な数字にも意味があると、励ましのことばで私たちを祝ってくれ



写真2 手話学習会（東雲会館にて昭和54年頃）
昭和48年の手話の会設立から9年間、会の行事は東雲会館で行われた

た。

筆者が手話を学び始めたのが昭和五十二年（一九七七）年の秋、市民手話講習会に通ったのが始まりである。当時は、例会も役員会も交流会も手話に関する活動は、すべて東雲会館が拠点だった。

しかし、福祉センターがオープンした昭和五十八（一九八三）年からは、例会場所が東雲会館から福祉センターに移り、例会曜日とも木曜日から水曜に変わった。

現在、手話活動の拠点は福祉センターで、学習時間は午後七時から八時十五分となっている

る。福祉センターオープン後に会員となった人たちのほとんどは、例会が木曜日に東雲会館で行われていたことなどは知らないだろうし、意外に思うかもしれない。
ちなみに、今の千歳手話の会規約第一条に記されている目的は次のとおりである。

本会は、聴力障害者（以下「ろうあ者」という）の日常生活の手段である手話を学びながらろうあ者と健聴者の連帯及び親睦をはかり、手話通訳者を養成して、これらの人々の福祉向上に貢献することを目的とする。

ろうあ者が使う手話があつての手話の会であり、千歳手話の会の目的である「ろうあ者と健聴者の連帯と親睦、手話通訳者の養成」は今も昔も変わらない。

平成十六（二〇〇四）年、千歳手話の会は設立三〇周年を迎えた。

千歳聴力障害者協会設立

千歳手話の会が設立された翌年の昭和五十（一九七五）年九月二十七日に千歳聴力障害者協会が設立され、初代会長は田丸昭吉だった。その後二二年間会長の座に就き、会員はもとより手話の会会員からも人望が厚かったが、平成二十一（二〇〇九）年一月に六八歳で他界した。

田丸も坂本から大きな影響を受けた一人であり、共に聞こえない仲間の暮らしを少しでも良くするための活動に人生を費やしたと言える。

二つの協会の設立を機に、聞こえる者は手話の会へ、聞こえない者は聴力障害者協会へと組織が分かれていくことになった。

千歳聴力障害者協会が昭和六十一（一九八六）年三月三十日に発行した『10周年記念ちとせがわ』の中で、坂本は次のような文章を寄せている。一部を紹介したい。

（略）千歳は、私にとって第二の故郷であり、川の流れをみても、小高い丘をみても、思い出が刻みこまれている。かつて少年の頃にここに住み、病に倒れて、千歳の地を離れた。そして二十歳の時、再び、千歳に住み再度倒れるのだった。千歳川の水は深く、冷たく、これほどおいしい水はないのに、そして、出会った人々は、皆やさしく、私の孤独を慰めてくれたのに、なぜ、私にとって水があわなかったのだろうか。今もって、不思議でならない（後略）

「いつの日にか」

千歳の水はあわなかったと述懐した坂本だが、支笏湖畔から見える風景に力強い未来を詠っている。再び、著作から一編の詩を紹介したい。

「いつの日にか」

いつの日にか あ の 山 に

高き所に 登らん

空を分けて 連なる頂き

雲かと思紛う 噴煙

深い藍の湖を抱いて

裾野は全て 原生林

願いつづける 夢

追い求める 理想

聞こえぬ さびしさに耐えて

目指すは更に 高き峰

いつの日にか あ の 山 に

高き所に 登らん

1971年6月 支笏湖畔にて

彼の目に映っていたのは樽前山だろうか……。この詩を詠んだ三年後の

昭和四十九（一九七四）年から札幌市のろうあ者相談員を務めることになる。五十年には自動車運転免許を取得、翌年には佛教大学の通信教育を卒業、五十二年からは札幌聴力障害者協会職員として採用されている。さらに、五十五年からは社団法人北海道ろうあ連盟の事務局長の職に就き、道内のろうあ協会を統括する当事者団体の事務方の長となった。

昭和六十（一九八五）年五月に千歳で第二八回全道ろうあ者福祉大会が開催された時、坂本は事務局長として、かつての仲間と共に大会成功に向けて力を尽くした。

坂本が望んだ「高き峰」とは一体どこだったのだろうか。

高き峰を追い求め、必死に登り詰めようとする彼の足もとを遮ったのはまたもや病魔だった。しかし、かつてのような孤独の中での病魔との闘いではなかった。

平成十（一九九八）年に彼が息を引き取る時、その傍らには愛する妻と掛替えのない息子と娘がいた。彼は手話通訳者として長年活動してきた妻に全幅の信頼を寄せていたという。

一人の耳の聞こえない青年が、かつてこの千歳に住み、悩み、苦しみながらも希望を抱きつづけ、そして生きた。

その後、青年は大人になり、ただ、しあわせになりたいと願い、その気持ちを書き連ね、一冊の本にしてこの世に出した。その主はもうこの世にはいないが、その精神は今も私たち手話を学ぶ者の中に息づいている。聞こえない人たちの中に彼は、さらに強く息づいている。

本当に人を動かすものは、ことばの力だということを坂本秀男は財産として私たちに遺してくれた。これは誰も奪うことのできない、時が経てば経つほど輝きを増す誇らしい財産である。

参考・引用文献

坂本秀男著『しあわせになりたい』光泉舎 昭和五十三年

千歳手話の会『千歳手話の会設立12周年記念講演会』昭和六十一年

創立30周年記念『共に手をとって翔こう』平成十六年

千歳聴力障害者協会『10周年記念ちとせがわ』昭和六十一年

（敬称は略させていただきます）ご了承ください

